

島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 第5号

編集: 島根大学ラフカディオ・ハーン
研究会事務局
所在地: 〒690-8504
島根県松江市西川津町 1060
島根大学法文学部 長岡研究室
発行: 2016年11月15日

【 研究小論 】

小泉八雲の宗教観

八雲会理事 池橋達雄



はじめに

ラフカディオ＝ハーンがどのような宗教的環境のなかで生まれ、どのような宗教観をもつようになったかについて、私の考えるところを述べてみたい。

1. ハーンが育った宗教的環境

ラフカディオ＝ハーンは、1850（嘉永3）年、ギリシャのレフカダ島で、父のイギリス人軍医チャールズ＝ブッシュ＝ハーンと地もとの女性ローザ＝カシマチの間に生まれ、洗礼名をパトリック＝ラフカディオ＝ハーンとつけられた。一家は父の出身地アイルランドに移ったが、母が精神的な病気となってギリシャに帰りまもなく離婚、父は別の女性と再婚し、幼な子のハーンは、大祖母の手で育てられることになった。

パトリックは、5世紀にアイルランドに渡ってカトリック教の布教に勤めた聖職者の名であるが、この地には妖精を信じるなど、以前のケルト系の精神文化も色濃く残っていた。母の出身地のギリシャも

ギリシャ神話にみるように非キリスト教の多神教の精神文化をもつところであった。少年になったハーンは、イギリスのウショー校・フランスのイヴト一校で学んだ。保護者であった大祖母は、ハーンをカトリックの神父にしたかったようであるが、ハーンにはそのような気が起こらなかった。

ところで、宗教という文化であるが、それはどのようなものであろうか。

『広辞苑』は宗教（religion）を「神または何らかの超越的絶対者、あるいは卑俗なものから分離され禁忌された神聖なものに関する信仰・行事」と定義している。宗教は、原始宗教－狩猟民族のトーテムイズム・農耕民族のアニミズム・遊牧民族のシャーマニズム－から民族宗教・世界宗教へと発展していくが、この間人格神信仰に変化していく。ギリシャ神話・インドの仏教・日本の神道などはアニミズムから発展した多神教（polytheism）と考えられ、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教などはシャーマニズムから発展した一神教（monotheism）と考えられる。今日の中東イスラム世界の情勢をみると、それを宗教だけで単純化して説明することはできないとしても、宗教が大きな要因となっているのは事実である。

ハーンは、アイルランドやギリシャの多神教的な精神文化と一神教のキリスト教文化に挟まれて成長することになった。

2. ハーンのアメ리카時代

1869（明治2）年、19歳のハーンは、アメリカに渡るが、以来ラフカディオ＝ハーンと名乗って、パトリックを捨てる。母を捨てた父への反感からと説明されているようだが、私は、ハーンがキリスト教と距離を置こうと考えたこともあると思う。

アメリカでのハーンは、初め『シンシナティ＝インクワイアラー紙』（*The Cincinnati Enquirer*）の、ついでニューオーリンズの『タイムズ＝デモクラット紙』（*The Times-Democrat*）等の記者となり、1887（明治20）年にはマルティニークへの旅をする。ハーンは在米中『中国怪談集』（*Some Chinese Ghosts*）や『仏領印度の二週間』（*Two Years in the French West Indies*）を出版するなどいわゆる異文化世界へ

の関心を強めていく。

アメリカ時代のハーンについてももうひとつ言っておきたいのは、ハーンがハーバート＝スペンサー（1820-1903）の社会進化論に興味をもつようになったということである。スペンサーは、1859年に『種の起源』(*The Origin of Species*)を著わしたチャールズ＝ダーウィンに深く影響を受けた人であり、ハーンがダーウィンやスペンサーに興味をもったということはキリスト教的世界観からまた距離を置くことになったことを意味する。

3. ハーンと神道・仏教

ハーンは、1890（明治23）年4月日本に渡る。来日の動機や松江中学の教師になるまでのいきさつなどについてはよく知られているので述べるのを略する。出雲については、バジル＝ホール＝チェンバレンが英訳した『古事記』(*The Kōji-ki, or Records of Ancient Matters*)を在米時代に読んでおり、神道についてもかなりの予備知識を持っていた。

ハーンは、この年8月30日に松江に到着するが、半月後の9月なかば通訳の真鍋晃を連れて出雲大社に参詣する。日本での最初の著作『知られぬ日本の面影』(*Glimpses of Unfamiliar Japan*)第8章「杵築」(*Kitzuki: The Most Ancient Shrine in Japan*)にはこの小旅行について詳しく述べられている。そして、いわゆる、西洋人の神道観について、

ある学者には、神道は、たんに祖先崇拜のごとく見え、ある学者には、祖先崇拜が自然崇拜と結びついたものに見え、またある人には頭からあんなものは宗教ではないと思われ、宣教師のなかの無知蒙昧な連中などになると、神道などは、最も低い形の邪教だとさえ考えているものがあるくらいだ。（平井呈一訳）

と批判し、自身は、

神道は、日本の国民的心情の、永遠不滅な、つねに若さに満ちた、最も高い感情が、宗教的に発現したものなのである。（中略）

自然と人生をたのしく愛するという点では、日本人の魂は、ふしぎにも、古代ギリシャ人の精神によく似ている。（同上）

と見、自分の血の半分をもらったギリシャと古代日本の精神的親近性を指摘している。この古代ギリシャと日本の親近性については、ハーンの日本での最後の著作で没後に出版された『日本一つの試論』(*Japan—An Attempt at Interpretation*)でもフランスの古代史家フュステル＝ド＝クーランジュの『古代都市』(*La Cité Antique*)を援用しながら詳しく論じられている。どちらにもキリスト教の影響のなかった時代のことである。

それではハーンの仏教に対する態度はどうであったか。『仏の穂の落穂』(*Gleanings in*

Buddha-Fields)（1897年）のなかの「涅槃」(*Nirvana: A Study in Synthetic Buddhism*)や『異国情趣と回顧』(*Exotics and Retrospectives*)（1898年）のなかの「死者の文学」(*The Literature of the Dead*)などの作品をみると、ハーンはかなり深く大乘仏教の研究をしているようで、仏教にも好意的な見方をしているが、両書の訳者である平井呈一氏の解説によると、ハーンが仏教に興味を持ち始めたのは、在米中ニューオーリンズで前述ハーバート＝スペンサーの『第一原理』(*The First Principles*)を読んだことがきっかけになったという。神道にふれるより少し早かったようである。

ハーンは、キリスト教からは自分の意志で離脱した。しかし、神道信者になったのではなく仏教徒になったのでもない。また、ハーンは宗教を否定したり嫌悪したりする無神論(atheism)の人でもない。ハーンは、宗教を各民族の持つ文化の部分と見て尊重しようとしたのであった。そして、キリスト教の宣教師のように特定の宗教を強制しようとする態度には強く批判的であった。このことは、前掲『知られぬ日本の面影』第19章「英語教師の日記から」(*From the Diary of an English Teacher*)の、ハーンと訪ねてきた石原喜久太郎との問答のところで、ハーンははっきり言っている。

ハーンは、1904（明治37）年9月に没した。墓は東京雑司が谷にあるが、墓碑には「正覚院殿浄華八雲居士」の戒名が刻まれている。ハーンが入籍した松江の小泉家は、臨済宗南禅寺派の万寿寺の檀家である。

おわりに

近年、ハーンがいろいろな民族の文化について接した態度を「オープン＝マインド」と呼ぶことが受け入れられるようになったが、私は非常に良いことと考えている。私のこの小稿もかれの「オープン＝マインド」を証明する役割をいくぶんかは果たしているように考えている。



講演会場（2016年6月18日）池橋先生提供庄原歩き経路図

【 ハーンとわたし 】

Hearn and I

Lynne Murphy

Hearn was a complicated character having had both devastating and enriching experiences throughout the course of his life. Born in Greece, raised in Ireland, further educated in England, and having established himself professionally in the U.S. he was exposed to such diversity of culture that allowed him to develop an open-mindedness and a level of imaginative ability that continues to impress.

Reading the work that he wrote during his time in Japan, I am impressed by his keen awareness of the sounds of nature, and observances of the people. For Hearn, *loneliness ended in Matsue*. Hearn's heart was soothed by the simplistic beauty of his surrounding environment, his mind inspired by the quaint, unusual culture. For me, as a foreigner who now lives in Matsue, this resonates with me. I, like Hearn, have been moved by the subtleties of expression in nature, and the calm, reserved demeanor of the people.

My interest in Hearn has been further heightened by the fact that Hearn spent his formative years in Ireland. Being from Ireland myself, I am curious to learn about the impact that the Irish environment had on Hearn, and subsequently, on his work.

Hearn, in the care of his great-aunt, had a strict Catholic upbringing. He experienced life in Dublin, sometimes visiting Tramore in Waterford, and also Cong, in Mayo. It is said that his experience of encountering the Celtic oral tradition through Celtic fairytales and ghost stories cultivated a powerful imagination, and inspired works such as *Urashima Taro*, *Mujina*, and *Himawari*. It is also said that it was the nature of Hearn's Irish upbringing that triggered the

development of the open-minded character that made him so receptive to the subtleties of Japanese culture. Hearn had the advantage of being able to see Japan from a Japanese perspective, and this set him apart from his contemporaries at the time. It is refreshing to think that while other Westerners were failing to truly understand, Hearn's interpretation was accurate and detailed.



Tramore: a picture taken by Noriko Kawashima

We know about how the literary impact of the Irish environment contributed to Hearn's work. I would like to know more about how the physical aspects of the Irish environment influenced Hearn. Apparently, Hearn found Ireland's long dark winters gloomy and depressing. This kind of weather scared him, and even provoked feelings of trauma when he thought he could see ghosts and spirits. The way in which the clouds loom low over Izumo reminds me of winter weather in Ireland.

It has been interesting for me to realize, that the weather is not the only common factor between "the Land of the Gods" and "the Emerald Isle". There is some resemblance in national character, perhaps because both countries are island nations. The Irish and the Japanese alike seem to prefer simplicity of expression and there is an expectancy of listeners and readers to be intuitive in their interpretation of language. One could consider that it was the Irishness in Hearn that allowed him to adapt so comfortably to the cultural environment of Matsue.

Through further exploration of Hearn's literature, I hope to develop a better understanding of Hearn, and the significant role that Ireland appears to have played in his life.

【 読書会の記録 】

事務局長 横山 純子

第 83 回例会

2016年4月16日（土）14:00~16:00

島根大学附属図書館ラーニング・コモンズ 2

14名参加 “In a Japanese Garden” (*Glimpses of Unfamilair Japan* chap. XVI.) 346.20-351.25.

第 84 回例会

2016年5月21日（土）14:00~16:00

島根大学附属図書館ラーニング・コモンズ 2

12名参加 350.18-354.35.

第 85 回例会

2016年6月18日（土）14:00~16:00

出雲市立荘原コミュニティセンター

池橋達雄先生講演「小泉八雲の宗教観」& 荘原町歩き 22名参加（会員12名、一般10名）

講演を聴いた後、池橋先生の案内で荘原の町歩きをした。ハーンは杵築に行く時に、荘原経由で行っている。一回目は、1890年9月13日に汽船で松江出発、宍道湖から船川を通り荘原に着き、杵築から9月15日に松江に帰っている。船川は新建川と並行して走っていた川であるが、第二次世界大戦後にほとんど埋め立てられて今は排水路になっている。船川は地蔵のある地点で90度北に曲がり、300m位先



明治時代の荘原船川の船着き場（撮影者不明）

池橋達雄編著『荘原歴史物語』（荘原公民館、2004）, p. 180.

の船着き場に至った。二回目は1891年7月26日で、この時は汽船に乗り遅れ、人力車で荘原に来ている。帰りは8月10日の朝午前9時に杵築を出て、荘原の辰巳屋（明治43年汽車開通時に荘原駅付近に移転し、今はない）に立ち寄り、昼食を食べ、午後4時発の汽船で7時頃松江に着いている。三回目は1896年8月11日の朝7時に松江を出て9時半頃荘原に汽船で着いて、帰りは8月18日の朝杵築を出たが、暴風雨にあい、荘原で泊まり、8月19日荘原を朝3時発の汽船に乗り、5時に松江に着いている。

ハーンの杵築行を考え、池橋先生の説明を聴き、すっかり様変わりした船着き場跡や変わらぬ山々等の景色を見ながら散策したのは実に面白かった。

第 86 回例会

2016年7月16日（土）14:00~16:00

島根大学附属図書館ラーニング・コモンズ 2

14名参加 355.1-359.10.

第 87 回例会

2016年8月20日（土）14:00~16:00

島根大学法文学部 115 教室

9名参加 359.10-363.32

第 88 回例会

2016年9月17日（土）14:00~16:00

学生市民交流ハウス

10名参加 363.33-371.28.

第 89 回例会

2016年10月15日（土）総会14:00~15:00

読書会15:00~16:00

島根大学附属図書館ラーニング・コモンズ 2

14名参加 371.29-373.37.

この日は総会もあり、今後の活動等について話合われた。今後もっと読書会を充実させ、もっと内容を読み込み、作品を読み終えた後で、作品を振り返って話をする時間をちょっと持つ等の意見が出た。またハーンの新聞記事調査と保存のために、彼がいたニューオーリンズの新聞 *The Daily City Item* と *The Times-Democrat* のマイクロフィルム（八雲会所蔵）のデジタル化を推し進めることが承認された。

これからも島根大学ラフカディオ・ハーン研究会は島根大学で活動していくので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。研究会の活動に関心がある方がおられたら、どうぞ積極的に参加してください。

謝辞 荘原歩きの記録をまとめるのに、池橋達雄先生と池淵一郎氏にいろいろと教えていただいたことを感謝致します。

編集後記：日本からとアイルランドからの二つの視点がここに明示されていて、とても興味深い5号となりました。（高橋栄）